

文語日誌（平成三十一年一月八日）

土屋 博

「山陽先生遺光」

昭和六年九月二十五日、東京市日比谷公會堂に於いて、「頼山陽先生百年記念會」開催せらる。「山陽先生遺光」（昭和七年刊、非賣品、一〇五頁）なる小冊子は、その企圖を永遠に記録せんが爲に編纂せられたるものなり。

同日午後一時半、第一部の記念祭舉行せらる。齋主東京府神職會長春田宣徳氏の祭詞奏上、主催者總代たる帝國教育會長林博太郎伯の祭文（謹み畏みて白さく）、來賓祝辞などあり。來賓には若槻禮次郎首相、倉富勇三郎樞府議長、一木喜徳郎宮相、井上準之助蔵相、田中隆三文相ら。主催者側よりは江木千之樞密顧問官、徳川達孝伯、齋藤實子、平沼騏一郎男ら。最後に頼家を代表し頼成一氏（廣島頼家當主）より挨拶あり祭典を終了す。

午後一時半より第二部の講演會に移る。

- 一 伯爵清浦奎吾「山陽先生に對する世人の批判に就て」
 - 二 文學博士三上參次「頼山陽と尊王思想」
 - 三 文學博士鹽谷溫「山陽先生と日本外史 附朗讀朗吟」
- 午後五時半散會す。

此の日東京中央放送局に於ては、先生の遺蹟並思想の跡を偲ぶ爲め、祭典の始より講演の終了に到る迄約四時間に涉り全國中繼放送をなせり。

講演第一の中にて清浦奎吾伯（一八五〇年生れ、最終學歷は廣瀨淡窓の開塾せる咸宜園卒業。第二十三代内閣總理大臣。）曰く、「今日山陽先生が贈從三位の恩典に浴せられたることは悦ばし。林道春先生、新井白石先生にても贈從四位なり。」と。

講演第三の中にて、鹽谷溫博士（一八七八生れ、東京帝國大學教授。大伯父は江戸時代の漢學者鹽谷宕陰。）曰く、「私も十歳の頃に初めて小學校に這入るべく學習院の試験を受けに参りました。其時の試験が日本外史の卷の一人で、平重盛が惡源太義平に追駈けられた所で『七匠櫻橘樹』といふ句の意味が分からないで困つたことを記憶して居ります」と。

當時の小學校入學試験問題（十歳の頃とあればおそらく編入試験）に日本外史より出題せられたることを知り、そのレベル高きことに小生衝撃を覺えたり。

（参考）日本外史の該當箇所

「重盛は門を排して入り、大庭の椋樹の下に至り、源の義平と、大いに紫宸殿の前に戦ひ、櫻橘樹を七匠し、出でて大宮の巷に至り、弓を杖つきて以て息ふ。平家貞之を目して曰く、平將軍の再生なりと謂ふべし」と。

匠はめぐる意。

（平成三十一年二月九日受附）